

江戸へ向かう途中の立ち寄り場所

英雲荘の起源は 1654 年に溯ります。当時は三田尻御茶屋と知られており、特別な役割を担っていました。徳川幕府時代（1600 年～1868 年）に、日本の諸大名は、将軍の監視の目が行き届くように 1 年おきに首都である江戸で過ごす必要がありました。地元の名主である毛利家も例外ではありませんでした。50 キロ離れた萩城を拠点として、防府の三田尻港までの街道を移動しました。江戸時代前期は大阪には船で向かい、そこからは陸路で江戸に向かいました。諸大名は普通のお宿において庶民と並んでの宿泊は難しく、首都へ向かうときに大名およびその家臣の特別な宿として、三田尻御茶屋が建設されました。

三田尻御茶屋は、何世紀にもわたってその規模に変動がありました。17 世紀には、地元行政の事務所と敷地の共有を行いました。しかし毛利重就（1725 年～1789 年）は、ここで隠居すると決断してから地元の行政府を締め出し、建物の居住部分を大幅に拡張しました。中央の建物は江戸時代である 1783 年に建設されました。この年に毛利重就は移り住みました。

1868 年幕末に封建制度は廃止され、大名は 1 年おきに首都で過ごす義務がなくなりました。その目的を失ったことで、結果的に日本の大名茶屋の大半は、売却されるか解体されました。三田尻御茶屋だけが存続できたのは、毛利元昭（1865～1938 年）が病弱でいてくれたことが挙げられます。元昭は防府の温暖な気候がよい効果があるという医者助言を受けてから、三田尻御茶屋に滞在して 1916 年まで暮らしました。その後三田尻御茶屋は、毛利家の第二の邸宅として使用されました。重要なお客が本邸に滞在中こちらに滞在しました。

邸宅は、3 世紀にわたる素晴らしい日本建築の縮図となっています。すなわち、入り口の建物は大正時代（1912 年～1926 年）、中央部の建物は江戸時代（1603 年～1868 年）、最も遠い部分の建物は明治時代に（1868～1912 年）にそれぞれ建設されたものです。

毛利家は、1939 年に三田尻邸を防府市に寄贈しました。コミュニティーセンターとして使用されており 1941 年に英雲荘と改名されました。第二次世界大戦後、防府市を占領したニュージーランド軍によって短期間ですが邸宅がダンスホールとして使用されました。

内装の見所

御座間

この一連の部屋は、18世紀に藩主重就が応接や接見するために使用した場所です。重就は最も遠い位置に腰掛けて、奥庭の眺めと、その反対側にある外苑の眺めを享受していました。（眺望の妨げを最小限にすべく、柱を特別に細くして邸宅の軒先を支えています！）部屋の細部には、社会階級への配慮がなされています。例えば、大名から最も離れた部屋区画にある畳の縁は黒色です。なぜなら重要度が最も低い人が座っていた場所だからです。同時に重要人物が使用する廊下には、柔らかく暖かい畳を敷いており、一方で使用人が使用する廊下には、冷たい木製の板を敷いています。

茶道を組み込んだ設計

三田尻邸の茶室は、数寄屋造り方式で造られました。茶道の美意識から着想を得た方式であり、自然で質素な素材を取り入れています。例えば、部屋の境目に設けられた欄間（しきり）がすべて異なる模様であることや、長押（横木）は、平らというよりも（木の幹のように）丸みを帯びている点に注目してください。縁側の引き戸には中国の詩が刻まれており、一枚板の杉から作られています。

二階

二階には素敵な眺望があり、庭園が見渡せません。繊細な檜の表皮から造られた屋根を見下ろす機会もあります。檜皮屋根は30年ごとに交換する必要があるため、自然の風合いを伝える手段になります。

豊富な家紋

毛利家の家紋には、オモダカ、または「一文字に三つ星」があり、毛利家出身の根拠になります。襖、取っ手および釘隠に家紋が付いているので探してみてください。毛利家がこの家紋を選んだ理由は、花の形が鋭い武器の先端を連想させるからであり、また勝ち草としても知られているからです。